過去の水害を忘れない―

＜カスリーン台風＞

■ カスリーン台風とは

昭和 22(1947) 年 9 月 15 日、敗戦の混乱から立ち直ろうとしている日本を、カスリーン台風が襲いました。マリアナ諸島東方海上で発生した台風は、次第に勢力を増しながら北上を続け、15 日早朝に浜松沖を通過し、夜には房総半島南端をかすめて三陸沖に去っていきました。

台風そのものは本州に近づいた時にはすでに勢力を弱めつつありましたが、日本列島付近には前線が停滞しており、停滞前線に台風の湿った空気が流れ込んで、戦後の記録に残る大雨を降らせました。

■ カスリーン台風の被害状況

9 月 13 日から 3 日間の雨量は渡良瀬川流域で 400mm 近くとなり、記録的な豪雨になりました。赤城山や足尾山地のあちこちで土砂崩れを起こし、流れ出た土砂は土石流となって下流の町を襲いました。

足利市内では、小俣地先、借宿地先、岩井地先等で堤防が決壊。特に岩井山の近くで堤防を突き破った濁流は、市街地を走り、住民が逃げる暇も与えず民家や工場を押し流しました。

渡良瀬川流域での被害は特にひどく、死者・行方不明者の数は利根川水系全体の約 3 分の 2 を占め、足利市でも多くの尊い命が失われました。

■ 足利市の被害※

死者	行方不明	家屋の被害				
		流出	全壊	半壊	床上浸水	床下浸水
252人	67人	372戸	328戸	257戸	11,976戸	5,773戸

※上記の記録がありますが、実際の被害は更に大きかったとも言われています。

商店街に氾濫した洪水の中を歩く人々（通 2 丁目）

市内の様子（郵便局保険分室前）

浸水した街中を歩く人々（市内）

浸水した街中を歩く人々（通 2 丁目）

浸水状況
（通 6 丁目付近）

＜令和元年東日本台風＞

■ 令和元年東日本台風とは

10 月 6 日に南鳥島近海で発生した台風第 19 号は、マリアナ諸島を西に進みながら、7 日には大型で猛烈な台風となりました。小笠原近海を北北西に進み、12 日には北よりに進路を変え伊豆諸島北部を北北東に進みました。12 日 19 時 00 分前に大型で強い勢力で伊豆半島に上陸した後、関東地方を通過し、13 日 12 時 00 分に日本の東で温帯低気圧に変わりました。

東日本大震災を上回る過去最多の自治体で災害救助法が適用され、足利観測所では 24 時間の雨量としては 1976 年の統計開始以来最大となる 253mmの大雨を記録するなど、カスリーン台風以来の大災害となったこの台風は、気象庁により「令和元年東日本台風」と命名されました。

■ 24 時間雨量

観測所名	降雨量（mm）
足　尾	425.0
津 久 原	353.0
足　利	253.0
作　原	377.0
松　田	302.0

■ 令和元年東日本台風の被害状況

山地では、多数の土砂災害が発生し、住家にも危険が及びました。河川では、かつてないほどの水位上昇を記録し、市内の中小河川において複数箇所からの溢水、越水による浸水被害が発生しました。

台風に伴う大雨により、床上・床下浸水等の住家被害のほか、自動車の水没、農地の冠水、農業用施設の損傷、商工業施設への浸水、道路や河川その他の公共施設の損傷等が発生し、被害総額は 88 億円を超えました。

■ 市内の被害状況

人的被害		住家	非住家	崖(土砂)	道路	河川	橋梁	排水・用水	その他
死者	中等症								
1名	2名	845件	45件	51件	271件	69件	12件	116件	132件

春日橋付近の護岸洗掘（小俣町）

倒木が道路を塞いでいる様子（松田町）

台風が去った翌日の様子（大久保町、川崎町付近）

渡良瀬川中橋付近の増水